

環海異聞

本三又

十二



k 44

富士山文庫



290.9

Ka

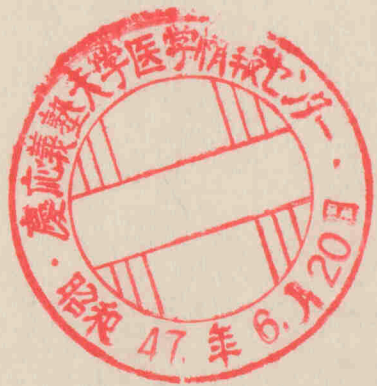
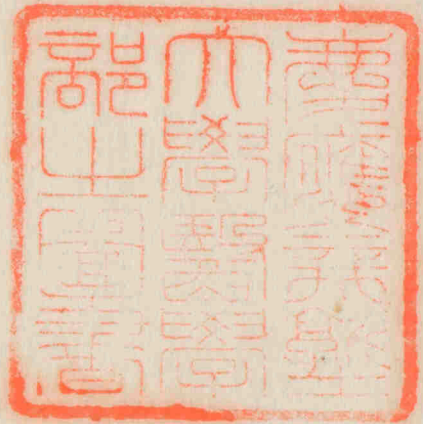
8

290.9

K

No. 2522

12 / K 44



富士川文庫

171

附三又



環海異聞卷之十二

本船お帆英帰朝洋中記

六月十六日

此の海と記す事の用と悉く述べ

てお帆すけと海のこととあれとも二日をさすは

とありありと揚々減るるは氣さうりきさきに

沖へあるは浪ひたのちとさるる雲霧の如くさゆ

同十八日 ダニツケといふ名の海とを述べけは

全く海なりといふ

按よけ海和葉といふオーストセイアス
船より渡へ川続きあり—めの川にまゐり
りもあり—や地を候せえて船へ—
カナスタより 武子に百里の海路を經て七月
既と見え—ダンツケといふ所のコツハイカツと云
ふは船をとむ

いふ海の中 船は是より船中間の仕切

る—もあきなり

いふ地よりのお船は是より所の海

より向地スウエイツケと云ふの海路は對向—
ハカイアイ

その間の船戸を—候—大船は揺動あり

並へ—海—程は是よりスウエイツケの海

すといふ—も是よりなり—ハ魯西亜の

親族のふれや—はあ

府下二里にあり人住なりとお連れり

見ゆる家造り 御道及寺塔の類もベトルフルカ
よ習するものもなき様と云西男女容貌も亦同
しき様なり 但被りおかしき習ふる様も
是ゆ 端毎中へ使節と陸へ到る人衆は
更々居たり且船中候ある所の端座を
陸へおけり是は何處なりと尋はる
此境へ船と泊りある人衆とこれ又端座
と云ふは是れ大法と云ふなり

い湊殺目洋海か帆の節ハ右の高梁徳料等
波ふは附礼——おませうとれり
けふより醫師を人画師を人お任せたり
太十郎ふと膝——府下と一見せり
い男船を掛く
不ろ六時陸へ
ふうふうとなりきり江戸尾屋も病氣
月夜う〜〜支えをたす是眼といへ—
船よのもちれり
卯の者たふ

魯西要人

按タレツケハ矛盾^テ馬^{マル}兒^ル加^カなり其^マ府^フをコツペンハイ
か」といふ

船へ向ふく石火矢をお射しやと彼より
そよこれハアケリの軍船なりそ船の何ぞ
の船くく何事の由ありてこゝにゐる
まやといふ是ハ魯西亞國より日本海への
使に船より何の由ありてきりよ石火矢
をお射しやと細水くくとまゐりしれそ
船のよのちける船の振子よとまゐりしれ
え遠く他方の軍船くくをたがの振子
と

せーハまひる忽のちりあれくくそ船の帆を
トクひくすく健をさくく追々海を抜のせ
まうくくそ罪を悔す使に中くこれを
まひくく何の由ありや他人よりくく人百
具くくアングリ船へ乗移りたりや船ハア
ケリの内をの渡りくく船をまかせ我をまか
るを渡りてくく船中を渡りてくく船へお
あれ彼よりくくアングリの船をまかせ

趣あり

い一事一なる事やと船中の人等

々るにハラニリースケ 拂席察といふとアングリ

はと毎夜戦あり 迎にハラニリースケ役所

られた又よせあるふもあへきくと軍船を

備へ堅固せし松子の木よ本船夜中を

せし夜ハラニリースケ舟の考せあるふと恐り

てかくの振とたる者とえ西使をハ彼の部

ロンドンとありていうたが一つあるまやとせし

本船を使席の令文とてアングリ國の口車と

いし湊の船をよせ使席の海りあると信文と

い所大湊とて軍船も余程是たりハニリースケ

より奪れりとして彼軍船をも多くてよ

常きとあり

湊のあな石火矢撃くは掛備へるより二階

の櫓あるまぬ船もあり

けふより新食也等を増へる 昨毎をけ
てあら何れ

くくも 珍果を増
かふより

按てアンケリは漢人利亜け方なり

イギリスより多國なれとも世は名譽の

英國あり 邦府を勃ロンドンといふ近來魯西

亞國へハ陸軍より事有全くそむ

度せけといとも種々誓約の事有とい

使に其邦城をとりいりた極めたるやふ

けふのや 洋流を詳に船をいませし漢の名

をいへす 原書携りある世界海路新図を熟覽
するは勃動の南端は東点有今面南

海辺ハム止海濱は東点ありけふは勃動をいけり
の一番兵ハレサノツト邦ありといてと陸なるあり
合はふつとやふをいへるハサノツトを結成し漢
ハム止と名付けたり勃動をいへるハハム止和常地
ありハハム止又ハハムモウトは邦は勃厄利亞ノハ
ヨルバ止の一城地なりて仕業なる大漢なり

邦府諸版の世界図 分あつて方角図表あり
たふ二面あり

氷ありありありなり

とてより後船なる時記より彼人ありきの
おハ船中し路目での記するれハ正院と
すんきとのハ又アニケリヨアの記はこれ
と對校してそ後船のハ又附記し
實況とある事一たのこ

い事終日曆アニケリの漢より我々船の漢よりあると記
ハ又ハトルブルクよりアニケリとの日並ハ又て略せり
是ハアニケリとの漢といはるる船の熟語より内洋とも
いふべきあるる處やとあるアララハ此の人すん
脱海とあるとする處又ハ船の漢語より後船とある
點く有け方のハ又後船のハ又實例とあるとあり

長崎訊より乃和解書とハ彼年曆一千

八百二年八月十一日ハペトルフルグとある彼

年月より我々和二年とある由漢語とあるハ其の年
癸亥六月五日とある

六月十三日とあるハ其の年なりこれ彼といハ年曆

月日の數もお違せるゆハかくの點ハある

處とあるハ是違ふとあるハ又あるハ何れも其の

船中よりアニケリとの日並終日曆とあるハ

ハ記とあるハ其の

アエケリお帆被る一ふ八百六三年九月廿二

日 我癸亥八月 二日ありしに くれより彼れに記す所の日並

を推しし我日曆よりあつて試むるは漂客

等時記の記すところと違ふすあつたは其の

記す日並は漂客より一をを端より一を

終りに合考ししものと目とあすのそと

そ実微をみるにともなるなり

お帆被る一ふ八百六三年九月廿二

同十二日辰使節の用事お津よりそい渡へ

来る者よりし本船お帆す

海路記を按するはお帆被九月廿二と有

我癸亥八月八日ありしに漂客時記に記す所の

よりくるり地島海路を按するは初む

お帆被るは南より向し洋中より島山の敷一向

よりくる但し初の門たのよりカラニツケ所葉地有

とはすなり

九月三日 次 カナリヤといふ港へ船を泊む

海路記を按するに彼十月九日カナリア港に

内へツロ島より船十隻と滞船か入日数

七のふりて十六日お船と名付これ彼十月九日

を我八月廿二日あり 船滞数に因るなり

海より見る日数六日也

按に亞弗利加大洲は度々西洋に往來

に妙なり亞弗利加と云ふは命を明人

記に謂ふ所なり之を度々西洋に往來

量と試みるなり 此に記す所なり

アといふは二也 漢書に其名を云ふなり

再いふ所の海路を記すにカナリアといふ島を泊る

島の名のヨナリにヨナリといふはアといふ島を泊る

にヨナリにヨナリにヨナリといふはアといふ島を泊る

海と日数 ヲウラハ洲より アメリカ海に候る

彼 九月廿二日 我八月廿二日 彼 同廿二日 我 同九日

い藤といふも綿の入る程の足腰なる人
去聲の果しとて船中へ乗る

蒲萄

形大なるけふ影を産する所の

蒲萄酒

按ヨカナリアウエ井ニとて世は名を酒上級の蒲萄

産する處なるへ又カナリセボゲル我邦

よりカナリヤといふ多もけ地の名をかり

柚

梨

橙ダイク

香橙クニシボ

林檎

葱

ホタニナのもきわ按よひ果し年中有べ

豕

鵲

野牛ヤキ

鷃

け外種く産有へ

船中より右の産を求め寄る用ひたり船へも

買へり

薪水を船へ増し舟のくしと陸に入るす太十

席を一人と陸せし概は是ゆ

人の屍を築きし物とけ所より求めある我

す様よりきおしおひを求めてもえは蓋を甲をたる

時を満ししのをききしるは今人の死骸なり

按之亦乃解るるへし詳説を詳す

此地を今三角所あるを云ふ

帆船の席を中より役人といふもの五人

羅紗の服魯西亜人の服と大抵三角帽を冠り

是又使臣の冠

帽を云ふ見送りとある其後破れあけし出帆

せんとする時彼者ともの方にて砲を撃たりこれ帆船を送りのれり

右カナリア諸島のり別な詳説

同十日頃カナリヤ帆船

滞留の日数凡七十余日あり

帆船は三日間ハ晴くの日を蒙りたり其

後ハ一面ハ一向是へすけ船中風浪甚大毎に己午の

方より来り是より数日沖へ入りしれハ雲多は

風静なり暑気極あり

酷くおどろき

あり是より入るても暑熱あり

海より来りし

此世界のま中へ来りし

船中祝儀あり水

たゞと酒杯のまぜたりとを不とエクトルといひたり
使節曰日本帰帆の時も
亦毎ひけ不とを思ふなりと

按はエクトルは羅旬語なりと赤道のなり
け不アメリカ海は度すへと海路記に檢す
るは赤及直下を思ふなりと以は彼十月十日
より十五日の留家十月一日より同二日までの
間と云ゆ

船師我くハ強りハカナリアより南アメリカまで

の海ハ世界第一の平穩なる不とて昂エクトルに
のりハありといへり年中け不ハ風も靜とて波穩
なる不也是より一日も走れハ風あるなり吾ハ船の
不とあるなり不思候のなりといふとといひたるまじ
き風靜なるゆへ却て船はくをくハ大ハ船程
換破せり

又イソレビョータロイチといふ人強りなるハエクトルの
下ハ海より動ぬもの之ゆへは星を測ることも

はよく—— 此の船はな——てハ動ぬ所有り地所の
かへあねハ南へも北へも汐乃たつなり又中里
程もさう——てたえハさうなり七日も東へをれを
水風ふくといふ程なる事も何るもの程と云たり

譬の語解

けささう南ハ一ツ星 ハ極星 七曜星は見えぬやうに
さう——夜我——ハ神の形跡さうに合ひたり亦及
とありさう——後をさう船を被るたりを自

鏡う——星を見ぬり何國のありしと云ふもぬぬ
双方より船の小旗を振り合せ——通り過ぎたり
沖を走る時海鳥のさう——たふち二三日ぬりた葉
紅船は似——るさうなりたりとびさういふ——は揃て
え——さう何け——も同じなり今思ふにカナリやう
南アメリカとの因乃海と云ふと云ふ

版——南アメリカといふ所へ船をさう——を運ぶ
は流ひたすは難儀程の事然しぬるは船中毎日水は浴
せり

十月十日と 南アメリカの国の一 エカチリテと
いふ大湊の船で泊る

按て海路記を檢すれば彼十月十九日我月吉
着岸くけふと海路の日曆前条に記せらるや

けふの南アメリカ洲中の一つの大湊と云由城下も
エカケリナといふ

按てブラシリ 伯西見の二港と云由地處甚だ海

邊の地と書とももブラシリと有フラシリ一の

南にある浪海といふ所の海は深く西はセントカナリナと
云ふ

いふ地有るなるへ 再び原島を熟覽するは伯西見の
海は船を泊めたる處を以て

なるを云ふればそこの地の名をききサカラリ三といふ處にエカラリ
ナと云ふ事ありいけ深なるへ けふ亦た伯南は八度の地こあり
和蘭人判りせる度程の表より北を度五十分は僅る非蒲湮見撰
せる輿地の書にサカタリに云ふ伯西見の海岸は廣くして亦た伯南
は七度とある凡そ航海する者熟識する所これ歐羅巴洲の
西方に向ふ長途の道なるは又海船こよむる難多等船
中の用を弁し 雨後大南海に向ふなり 在伯西見の
海邊ハ彼ル杜瓦ル人 所居の地なり

け地ポルトガリ 彼ル杜瓦ル人の所所と云由湊は大なるれと
も入海し 西へ浅く大船は入るなり能はす

け入にや山河成節も流れ流るる所と見え

湊の内よりマニゲリ船二艘即ち英國船二艘かり居る

そ濱より堅固の石火矢を備へ置たり土地の舟細く

長くして毎の葉乃や一層ハ丸木二ツ割すたる物へ

板を拵し置く物も長サハ江戸の舟身舟よりハ短し

け本年中一足氣酷熱の地うて冬寒といふる所なり

少り船中何れも目よ二三度ツゝあると浴せり魯西亜人ハ何

程度暑くても膚を露すといふるれく水浴しても

虫よひへのおを忌すたふ毛織物を忌す皮裘を

夏月より用ひぬといふてなり

土人を忌す一ペテルゾルカうて居るクロボフは忌み居り

又まづりハガ一病を忌す男女たは跳^{スアリ}且^{ハガ}跳すても殺

引中を忌すカナリヤうて居る人のと一但^{チバレケ}孝毛緒

髪うく一眼ハ忌す一女子と忌す一脊へ風呂敷の模

板にきたる物とおを忌すより下ハ本線又麻の織物うて

袴の裾廣くはきたる物とおを忌すよりソロシヤ

の婦人のこと——男女たよ入妻はせぬ

小児も多き——丸裸なり男女も齒はき——たよ

松脂のこきしものとを噛むふり口を動かして舌を動かす

け湊より廿里程奥へりけはふ新程の家在り

太十帝ハと隣東造りハ尾より下をたよはけ二尺程より

とハ五尺を以てききあき——屋根ハ椽の皮の用也

按はけ居を明あき

寺も有りオロシイアの寺の屋とはあるものとき十

文字のおと建て——あり寺内ハえす礼おを極子と

見るは我日本の人のおと因——

按はけ寺ポルキエカルより建てる所なり——

津太史と隣——水車より——茶を煮る所をえたり

家石造り屋根ハ椽の束を二つ割り——て藁を

くききえられ居るもの——ある車ハ——て三六破

はりすははは掛たるおこ

けは茶夥な程なり——

ミラケ
精茶——て多く地

西へ交易するあり自由なる事を食ふを禁
蜀黍を移し湯入れ糊のしきりて用ひ
多く用ひす他國へおとくをばし唐黍我
邦のおと目一様ある地のおより

唐黍木船へ賣入牛豚馬等の脚をせり山を樹
木繁茂すえきれたるあま香橙橙橘なり
程多のふた大なる山あり政令中へ登れぬ
ヲロエヤ人もけしとるくあまきなり

けしとるく洋中へ橋をいせあまき
て後使節等の役く上陸し山を立木を賣
帆柱をけり彼をすて整くけしとる

引あしきとるくを渡すてえりしは
あまきとるくも交りたるあまき彼人
セリリトひたり是のあまきといふ

唐黍影し船中へ移入れたる

荻 ダイコン 菜菔 細い味い 芸菔 きり 冬瓜

スイクリ
西瓜

カホチヤ
番南瓜

キウリ
胡瓜

蒲萄

トウガラシ
番椒

実ふりしもの
豆のひくもるり

蜜柑

柚

小まり
胡桃

柿

サトウキビ
耳蔗

一本太き一本細り有り牛の
飼料は餅中多く実入り

白沙糖

大ひるる本の実影くありと皮厚く剥きしこれハ

穀物くかき人面のもき取あきしは肉油一そ

いはあり耳まき胡桃のこき人毛をきり

ひきけき海を游きまきりみ人髪をきり

これを常味め食するよは中味く暫時は熱をさる

ゆきりいりたれく常味食せし

そ名を聞ひしは忘れしは茂雙島あけ國

暖地なれハ椰子さしうと

椰子を要ふこといふ友
コッコス

コッコスといふさうりやと向れハは太夫手と

あきいふも向ておかせり彼人等コッコス

とゆへり肩を殻をさるは作ら持合せりえせ

系しせんといふ他目とそれハ果て椰子殻也

椰子のり 産別と詳書の記述あり

生身く 青実のまゝあるコツコスと多く 毎入より

穂柄 け古産ありと云ふ 石見

長めく 房をり たるものお集りて 亜夏と解

一伸緑毛一房は二節角をきき二寸計あり 袖の縁り 熟されハ

肉黄く なる青を口よりて 一あるもて 又熟せる

おのこく 房門を白く 味耳きるわけいのこく 仁ハ

ちく 一房二三十房つくとのハ二五房程あり 亦ある乃

字のく け 是と云ふが 極たのこく



一 綿ハ山へも里へも種蒔する六尺程の本
葉も大なるもとも葉綿の葉に遠くする

按——本綿なるへ——

一 五月末落葉——即黄毛の葉も有との絨
船へ廻へ来れり也葉はあり——日人といひ
——ハこれ葉檀なりと

一 葉ハ名足と名西少葉ハ多——

一 葉ハ世^皆生へり——何り葉多——牛も同——

腮脂多——脂多——とて魯西亜ハ
食を以

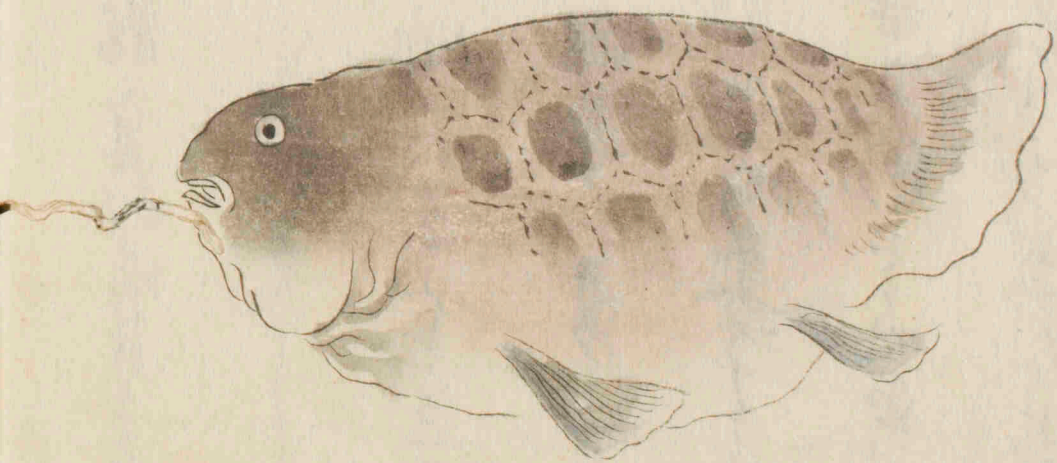
一 葉は——鼻と喉と赤く色あ——りるハ

——さ小葉何り唱多ハキウ——といふ人

舌をむせハ葉を以——吸するりあふ多

一 甲の口角——葉ハ何る鼻何り何といふ

ものやそあハきうハ河豚の如ハ何り



一 猫ハ三毛なり我方のものと同一俚氣つ
ふきねく物ハ別ニ整ふるふきを極まり

一 尾長様あり 船中へ買入烟おきしふ目

一 鰓死^{ヲテ}たり

一 毛崩^ときく 澄白^とく 尾毛ハ虎斑文

二 戸斗り人なるれ安き歟あり 魚身 魚具

あり是をば是^となり 船中ニ畜養なり

此門を止ハカニニヤ一ツカニ名^の時同所

あけたりあり 三丈ハ船中まで追ひ驚きたり

一カルセルといふおのふれりといふは御の生を

ものと身へ粘糸せりその体の長フシに人皮厚

く是處まで鱗のきききき尾より利

あり口のきれありりたるゆせす斗八重歯

生す目のとと激く痛のととるもの

あり御爪のとと何りてきき二す斗り有

そ目のとと痛のとととおるお生をくれは海

なりぬるも油もも酒も人もなり食ふと云

たよ画は書たる新をえるよと何るは

うもええたれハ新のよとえくたや合り

赤人船中より海は深く教へ白き草を

つげを傷をえたり目もぬきておを入へ

生おのとととととととととととと

按はひ書といふコロコジルは品を按するよ

舞るりカルカルヒルハコロコジルは音おをく且

形状も鱷^ワにお似たり 和葉を食ふを
 あせるゝ金くこれと目くくてあぐ
 えーあふあふといふを鱷も不純てま
 を製するうたのこ
 コロコビル 沢説別より

カ
カ
ル
カ
ル
セ
ル
図



那快も輕よお何う
 ぶせると今くころ
 えーあふあふとい
 をおさす。うたの
 コロコロ 沢路別

ぶろろろろろろ



ガルカルセル 図

ぶろろろろろろ
 ぶろろろろろろ
 ぶろろろろろろ
 ぶろろろろろろ

ぶろろろろろろ
 ぶろろろろろろ
 ぶろろろろろろ
 ぶろろろろろろ

一 げんまゝ おをさうふゐ「イレパンツケ

伊新 把你

の金根まゝ 交易せ

けり親目洋銀紙用替ひお帆の用をあら端
左の目親並糸は洋うす

十二月廿八九日

エカテリナお船

按に海路記に彼船より八百四十年二月八日お帆
より由これ我同年十二月二十七日より
漂着の略記と大抵合すけ湊洋銀七十日

けりとお帆より向ひをりけるは是を暑熱裸體
て堪へるは先き入る程海に次ぎはきく
そえゆけ亞墨利加大海のふ南のお帆の海より
といふ所はあるけり何れといふ船なりと船中の
人より聞かれはコリノメスと云ふよりてあるを
きりお帆よりけり親をよりしりし向へを又
暖まるる所へ向ふと語れりけり多より地を
をめりし山中より火煙立ちけりふ絶え入よりて止

按之和葉といふ^大エールランド^地なり

此地^の山より吹来る風^をて^て巨^きなる^を
船を^を出す^る時^をて^て吹来る^は南方^の沖^へ
流^{され}れ^る習^ひなり^に三月^は此^をと^はん^す
雷^{あり}く^きき^きも^も流^れ船^中の^人の^脚を^を船^の
の^根子^を何^れと^もい^ふは^はこ^のより^{より}
い^ふく^く南^へ流^{され}れ^る七^十度^はこの^海と^はなり^{なり}
氷^氷り^り船^をぬ^るなり^{なり}とい^ふ

七十度といふ^{七十}の^度は^度セイムテサツガ^度ラトと

い^ふたり^りと^と南方^も氷^氷極^下と^と同^じ極^下に^に
を^をり^りい^ふく^くある^るは^は拂^拂帛^帛察^察鑑^鑑版^版の^の世^世界^界
図^図の^の南^南極^極下^下も^も氷^氷海^海界^界限^限の^の所^所なり^{なり}と^とい^ふ
漂^漂る^るの^の所^所を^をい^ふサ^サン^バマ^マヤ^ヤウ^ウと^とい^ふと^とい^ふせ^せ
時^時なり^{なり}と^とい^ふく^く氷^氷海^海へ^へ入^入り^り氷^氷極^極下^下を^をい^ふ
七^七十^十度^度後^後と^とい^ふく^くある^るは^はこ^のより^{より}漂^漂る^る等^等
南^南氷^氷極^極下^下に^にを^をき^き海^海と^とい^ふ極^極を^をい^ふは

未だ有る奇中のおといふへー又南
亞墨利加海の狭きる熱帯の帯はく
あるの大海より

七十度前後を航行する船もなればそれより更に危
すゝぬといふげに人のいひふかしの危難は
それ——船は西風とも吹雪りドローブラステ
ジタの方へ船なりたきと念せ——

按は彼木板の世畏ふは亞弗利加海のカー

ポデク——デホーポ 和葉名はうて明人の
不伏喜望望也 のおとい

名ありこれ右大海の碑——と和葉の船
より北へ出る船さあたるより北へり——と
船は實は危難とて有——と云ひやれたり
彼をとする門風吹雪り吹風よりゴリノメスを
早り北の方へ向——と云うたれば船は鳴せ——と
又潮く暖帯の海と云われり
海中は潮の涌あ——と云ふる所をなり

なるよりありしうと也なるうらの海と並びし
やとさへなり

